

# 絵で見る遺産

## 地主神社（地主権現）

全山が花に埋まる清水寺の桜は、「清水の桜」と言うより、古くから「地主の桜」と呼ばれることが多かった。地主とは仏教が入る以前からの土着の神で、清水寺の本堂は、まるで建物全体が地主権現の拝殿のような位置に建てられている。また地主権現は、14世紀後半には、鎮魂の信仰に関わるといわれる「花の下連歌」の主要な開催地になった。また、今はないが永正7年（1510年）には、その岩下の南側側面に、本堂を真似た小型の舞台を持つ朝倉堂が造られた。

## 本尊下の土壇

秘仏十一面千手観世音菩薩立像を中心に、向かって右に毘沙門天、左に地藏菩薩、周囲に二十八部衆を祀った正堂中央部の須弥壇の下にある。本堂の再建に際して、いらなくなった土壇を残し、本来板が入る須弥壇の側面を縦連子にして、その姿を見せているのは、この土壇が信仰上の重要な拠り所であることを示しているのであろう。

## 本堂

寛永10年（1633年）再建の今の建物は、正面柱間9間、側面7間の本宇部分の東西と北に裳階、正面に庇をめぐらせた寄棟造りである。平安時代には、現在の本宇部分と同じく正面9間で、本尊を祀る正堂と前面の礼堂、付属する参籠のための局、そして舞台があった記録があるので、建物の主要な平面は平安以来、変わっていないと思われる。ただ、翼廊の舞台楽屋は文明16年（1484年）本堂再建頃の増築で、照り起りを持つ檜皮葺きの美しい屋根も、その形は創建後、幾度か変更され、現在の形になったのであろう。

# 清水寺の懸造り

監修・執筆 日本建築意匠研究所代表 松崎照明  
イラスト 香川元太郎



## 音羽の滝

山中の湧水は、平地に実りをもたらす水の源として、仏教伝来以前から土着の信仰を集めていた。また、行者にとっては、神仏に供える盥伽水であるとともに、欠くことのできない生活水でもある。昼は観光客で賑わう現在でも、早朝には水行をする行者の音が響く。

## 懸造りの架構

最大直径約75cm、最長12m、長短78本の樫の束柱で築き上げられた懸造りは日本最大である。すでに12世紀初め頃には、かなりの高さの懸造りだった記録があるが、水平な貫を多用して床下を固める現在の方法は中世以後から近世の方法。平安時代には長押を水平に、あるいは斜めに釘で打ち付けて固めていたのである。

清水寺の舞台のように崖や岩にもたせ懸けて造られた建築の形式を懸造りという。清水寺が懸造りになったのは、この寺が本来、音羽の滝の霊水を中心とした山岳信仰の行場であったことに起因するのである。山岳信仰の社寺では古くから、傍らに水が湧き、神仏が現れる岩や岩窟に密接密着し、かつ霊地を壊さずに建物を造るため、懸造りの手法が使われた。

例えば、清水寺と同じく平安時代以来の懸造りである石山寺（滋賀県）や長谷寺（奈良県）では、はじめに、土着の神（地主）の座す岩上に、修行僧が観音像を祀り、周囲を最小限平坦にして、その上に小堂が建てられた。そしてその後、行者や参詣人の増加に伴って、前面の屋の上に懸造りの礼堂や舞台が増築されたのである。清水寺の本堂は岩上ではなく、地主神の岩山の前にあるが、立地条件や平面形式はよく似ており、懸造りになった経緯はほぼ同じと見てよい。

清水寺の本尊下に、今でも残されている平安時代の土壇は、本堂の位置が創建以来不変で、その懸造りの造形が、聖なる水と神の座す岩からなる行場での、修行の形と礼拝空間の歴史との結実であることを示しているの

